

子どもに分かりやすい翻訳とは 一絵本『星の王子さま』から一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054273

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



子どもに分かりやすい翻訳とは ——絵本『星の王子さま』から——

経済学類4年 渡邊 莉音¹

<概要>

サン=テグジュペリ (Antoine Marie Jean-Baptiste Roger de Saint-Exupéry) の『星の王子さま』(Le Petit Prince) は、1945年にもともと児童文学として刊行されているが、大人も読むべき作品として人気を博している。また、日本では1953年に内藤濯訳による『星の王子さま』が最初に出版され、2005年に著作権保護期間が終了し、それ以降日本語だけでも少なくとも20人の訳者によって翻訳されている。筆者自身も、2～3冊の別の訳者によるものを読んだ経験があるが、訳者が違うと作品の印象もかなり変化する。刊行されている書籍には小説版と絵本の2種類があり、もともと児童文学である作品を、絵本、つまり更に小さい子ども向けに翻訳するとどうなるのかということに興味を持ち、地の文の文体や漢字の使用量、内容の省略の程度、小説版と絵本版での表現の違いなどの観点から調査した。

<キーワード>

翻訳、絵本、星の王子様、子供向け

¹ rio617_jasmine@docomo.ne.jp

<目次>

0. はじめに
 1. 先行研究
 2. 問題設定
 3. 調査方法
 - 3.1 地の文の文体の比較
 - 3.2 人称表現の比較
 - 3.3 省略内容の比較
 - 3.4 漢字の使用の比較
 - 3.5 使用語彙の比較
 4. 調査結果
 - 4.1 地の文の文体について
 - 4.2 人称表現について
 - 4.3 省略内容について
 - 4.4 漢字の使用について
 - 4.5 使用語彙について
 5. おわりに
- 参考文献

0. はじめに

サン＝テグジュペリ (Antoine Marie Jean-Baptiste Roger de Saint-Exupéry) の『星の王子さま』(*Le Petit Prince*) は、1945 年にもともと児童文学として刊行されているが、大人も読むべき作品として人気を博している。また、日本では 1953 年に内藤濯訳による『星の王子さま』が最初に出版され、2005 年に著作権保護期間が終了し、それ以降日本語訳だけでも少なくとも 20 冊以上の翻訳版が出版されている。筆者自身も、2～3 冊の別の訳者によるものを読んだ経験があるが、訳者が違うと作品の印象もかなり変化する。また、様々な作者によるものを探しているうちに、書籍が小説版と絵本の 2 種類あることに気づいた。もともと児童文学である作品を、絵本、つまり更に小さい子ども向けに翻訳するとどうなるのかということに興味を持った。

1. 先行研究

霜崎(2007, p. 41)は、海外文学の翻訳について、「翻訳者は自らの表現のスタイルを持っており、それは翻訳者が原典をどのように読んだのか、理解したのかの反映でもある。」と述べており、翻訳者はただ単に原本を直訳しているのではなく、私たち読者はその翻訳者のその本に対する解釈を読んでいるとも言える。よって翻訳者が違えば作品自体の印象にも影響を与えるのは当然と言える。

稲垣(2016, p. 106)では、子どもの本の翻訳について、「『子どもの本』には子どもの年齢すなわち学年に応じて厳密な制限がある。小学校の各学年で学習する漢字(語彙)が学習指導要領の『学年別漢字配当表』で決まっており、この範囲内でしか訳語を選べないし、訳文も相応の難易度になければならない。」とされており、牧田(2018, p. 138)では翻訳版の小説 4 冊について、大人(高校生以上)向けと子ども(中学生)向けの違いは想定読者層、人物像が関連していることが明らかにされている。しかし、文体については「文体の差異について、予想とは異なり、複文、短文・重文の項目については差異が見つからず、またその理由として「翻訳は原文に忠実であるために、あえて短文や重文に文を変えるのは難しいからなのではないか」と指摘している。稲垣(2016, p. 107)では、地の文の文体の翻訳に関して、「*Le Petit Prince* は戦略的に『子どもの本』の体裁を採っているとする筆者は、児童書の常套的な体裁である『です』『ます』調を拙訳『星の王子さま』で採用した」としている。

絵本の表現技法について、竹内(2002, p. 18-19)は、「最近では大人にも絵本の読者が多い」という前提はあるものの、「もともとは幼児のもの。本そのものの作りも幼児の読者を前提にしている」と述べ、成長段階の幼児と大人とでの感覚のちがいで、違いが起こる理由を「いまだに十分に各感覚器官が発達していない」ため、また、「知覚の主体である幼児の身体の大きさそのものが、僕たち大人と大きく異なり、理解の差を生んでいる」ためであると述べている。また、2つ目の理由については幼児の感覚を「未熟」と呼ぶのは誤りで、大人以上に敏感にものごとを受け止めている。」とも述べており、絵本を作るにあたって、絵本作家は子ども向けの表現についてかなり気を使って選んでいるということが分かる。

また、児童書としての原文について、大人向けか子ども向けかでの翻訳の差異は研究されているが、絵本に関する翻訳の差異は先行研究では明らかになっていない。

2. 問題設定

一般的に絵本として出版されている作品は、全体的に文の量が少なく、ストーリー展開も速い。そのため、少ない量の中に必要な要素を詰め込まなければならないということであり、絵本としての翻訳は、小説としての翻訳よりもさらに訳者の解釈がより強く現れると考える。また、調査対象とした絵本がどれもページ数、文字数ともに小説版よりもかなり少ないため、内容は省略されている部分も多く存在すると予想することが可能である。以上の点から、文体や漢字の使用頻度と種類、ルビの有無に加えて、翻訳者はそれぞれどのような部分を省略し、どのような部分を翻訳部分として採用しているのか、また、子どもにも分かりやすい表現としてどのような単語、言い回しに変化させているかについて調査を行う。

分析に使用した絵本は、池澤夏樹訳²、奥本大三郎訳³、工藤直子訳⁴、堀あいえ訳⁵の4冊である。また、原文に沿って訳されているものと比較を行うために、絵本の訳も行っている池澤夏樹訳の小説版⁶を利用した。

3. 調査方法

『広辞苑』では、絵本とは「絵を主体とした児童用読み物。」と定義されており⁷、ほとんど全ての絵本について想定読者層は子どもを対象にしていると言える。“子ども”の定義が曖昧になりそうなので、絵本を読む子どもの範囲として、本研究では未就学児に加え小学校低学年と設定する。

また本研究では、比較対象として取り扱う部分を、この作品で代表的な場面として頻繁に取り上げられる、王子さまの地球到着後、一匹のキツネとの出会いから別れまでの場面に限定して調査を進める。

3.1 地の文の文体の比較

稲垣(2016)では、子ども向けの本において、地の文で丁寧体(「です」「ます」調)が使われているものが多いということが明らかになっている。これは絵本でも当てはまるかどうか、地の文の文体を比較する。

3.2 人称表現の比較

文中で王子さまとキツネがそれぞれどのような自称詞と対称詞を使っているかを比較する。また、それぞれの絵本において、違いが見られた場合、その意図を推

² サン=テグジュペリ(2006)『絵本 星の王子さま』池澤夏樹 訳, 集英社.

³ サン=テグジュペリ(2007)『星の王子さま』奥本大三郎 訳, 白泉社.

⁴ サン=テグジュペリ(2015)『絵本で出会う 星の王子さま』工藤直子 訳, ひさかたチャイルド.

⁵ サン=テグジュペリ(2015)『絵本 星の王子さま Le Petit Prince』堀あいえ 訳, 徳間書店.

⁶ サン=テグジュペリ(2005)『星の王子さま』池澤夏樹 訳, 集英社.

⁷ 新村出編(2008)『広辞苑 第六版』岩波書店より引用(p. 323).

測する。

3.3 省略内容の比較

池澤訳の小説版を参考に、調査する場面での登場人物の行動を箇条書きで書き出した。内容を一部書き出すと、以下のようになる。

1. キツネが現れる。
2. キツネが王子さまに挨拶する。
3. 王子さまが挨拶を返す
4. 王子さまが辺りを見回してキツネを探す
5. キツネが自身の居場所を教える など

こういった行動は全部で 63 個あり、このうちのいくつが各絵本で採用されているか、またそれぞれの絵本において採用された内容を比較する。

3.4 漢字の使用の比較

絵本の想定対象読者層を小学校低学年(第 2 学年)までとし、使用されている漢字は学習指導要領の学年別漢字配当表に当てはまっているか調査する。また、ルビの有無についても調査する。

3.5 使用語彙の比較

池澤訳の小説版と 4 冊の絵本をそれぞれ比較し、3.3 で採用された内容の中で一致する部分の翻訳の仕方、表現の違いを比較する。また、違いが現れる背景について考察する。

4. 調査結果

4.1 地の文の文体について

地の文の文体についての結果を表にまとめた。

表 1

	池澤夏樹訳	奥本大三郎訳	堀あいえ訳	工藤直子訳
文体	だ・である調	だ・である調 (※)	です・ます調	だ・である調 (※)

まず、地の文の文体について、先行研究で述べられている子ども向けの本の基準に当てはまる丁寧体の「です・ます調」が使用されているのは堀訳の 1 冊のみで、4 冊中 3 冊で常体の「だ・である調」が使われている。また、表で※印を付けた奥本訳、工藤訳については、完全に「だ・である調」ではなく、口語体で書かれているという特徴が見られた。奥本訳では、「っていう声でしたの。」「とってもきれい

なけものがいたんだ。」「ペットにしたんだって。」など、語尾が読者である子どもに語りかけるような調子で使用されている。また、工藤訳は「ねえ ぼくを なつかせて!」や「そんなふうに することさ」、「王子さまも しっかり わかったよ」など、本来はセリフである文に「」や“”などの引用符が使われず、地の文として存在するものが多い。よって、読者が登場人物に代わって話したり尋ねたりしているような、表現が多く使われている。これによって、奥本訳と工藤訳は、「だ・である調」の文体の翻訳だが、親しみやすい、温かい雰囲気の記事になっている。工藤訳に関しては、訳者の工藤直子自身が絵本作家であり詩人であるため、言葉遣いも少し詩的な印象を受けるものが多いと感じた。

4.2 人称表現について

王子さまとキツネの絵本における人称表現を調査した結果をまとめた。

表 2

	池澤夏樹訳	奥本大三郎訳	堀あいえ訳	工藤直子訳
自称詞(王子さま)	ぼく	ぼく	ぼく	—
自称詞(キツネ)	おれ	おれ	ぼく	ぼく
対称詞 (王子さまからキツネ)	きみ	きみ	きみ	—
対称詞 (キツネから王子さま)	きみ	きみ	きみ	きみ

人称表現において差異が確認できたのは、キツネの自称詞のみで、他はすべて一致している。キツネの一人称の「おれ」「きみ」の違いについて、「おれ」という自称詞は、男性が、強い、または自分自身を強く見せたい場合に使ったり、自分よりも下に見ている相手に対して使ったりする。この作品で登場するキツネのキャラクターは、王子さまに対して上からものを言うような口ぶりであることが多い。また、「王子さま」という知らないことが多いキャラクターであるため、王子さまとキツネとのキャラクター設定に差を出すため、池澤訳と奥本訳では「おれ」が採用されたと考えられる。

堀訳、工藤訳では、キツネにも王子さまにも「ぼく」が採用されている。これは、「おれ」という自称詞は公式の場やかしまった場では使えないものであることから、語彙の少ない子供に対して正しい言葉を使うことを意識した結果であると考えられる。

4.3 省略内容について

まず、63 個の行動のうち絵本において採用された行動の個数とその割合を表にまとめた。

表 3

	原文 池澤夏樹訳	池澤夏樹訳	奥本大三郎訳	工藤直子訳	堀あいえ訳
行動の個数	63	42	34	9	22
使用割合	100%	66.7%	54.0%	14.3%	34.9%

予想した通り、すべての絵本において行動の省略がみられた。中でも、工藤訳は原文訳の内容のうち14.3%しか使用されておらず、訳者自身が必要と思った部分のみを抽出した顕著な結果であると考えられる。

次に、選択された行動の内容について、4冊ともに共通していたのが、次の5項目である。なお、「飼い慣らす」や「絆を作る」という表現については、この段階では池澤の原文訳で使われている表現をそのまま使用した。この表現の翻訳の差異については使用語彙の部分で詳細に分析する。

8. 王子さまと一緒に遊ぼうと提案する
9. キツネが王子さまの提案を断り、その理由は「飼い慣らされていないから」だと言う
11. 王子さまが「飼い慣らす」の意味を尋ねる
18. キツネが「絆を作る」ことを詳細に説明する
56. キツネが王子さまに「秘密」を教える

工藤訳で使用されている行動数に合わせるとかなり少なくなるが、上記6項目は省略された中でも共通して選択されている。これは、言い換えると、どの訳者も共通して子どもに伝えるべき、『Le Petit Prince』のストーリーから読み取れる作者サン＝テグジュペリのメッセージであると認識した部分だということである。またその内容は、他者との信頼関係を気づくことの大切さであると考えられる。

4.4 漢字の使用について

本文中で使用されている漢字を抽出し、文部科学省の学習指導要領の学年別漢字配当表に従って小学校の第2学年までに学習する漢字と第3学年から第6学年で学習する漢字、それ以外の漢字、つまり小学校では学習しない漢字に分類した。その結果を表にまとめた。

表 4

	池澤夏樹訳	奥本大三郎訳	工藤直子訳	堀あいえ訳
～小学2年生 で習う漢字	言、王、子、一、今、 聞、何、万、中、気、 目、分、地、外、星、 話、食、毎、日、思、 小、麦、自、時、間、 明、少、近、帰、会、 戻、度、大、教、水、 話、花	草、声、王、子、木、 下、見、答、言、人、 作、心、足、音、楽、 麦、金、上、風、色、 思、出、園、一、教、 星、行、花、知、自、 話、大、切、時、間、 手	会、王、子、友、星、 金、麦、風、思	声、王、子、 大、男、花、 麦、金、色、 毛、時、見、 日、心
小学3年生～ 6年生で習う 漢字	現、遊、悲、仲、特、 別、球、鉄、変、穴、 喜、畑、関、係、次、 発、幸、福、戻、度、 事、庭、世	返、事、遊、動、物、 結、畑、好、別、悲、 泣、度、秘、密、輪、 囲、忘、世、相、対、 責、任	遊、忘、世、界、待、 畑	好、世、畑
それ以外の漢 字	誰、緒、匹、砲、撃、 奴、髪、離、戻、鉢	寝、髪、吹、慢、嘘	髪、穂	髪

4冊に共通する点としてまず、本文中に複数回登場するものも含め、すべての漢字にルビが振られていた。また、使用されている漢字について、すべての絵本において第2学年までに学習する漢字以外も使用が見られる。池澤訳と奥本訳に関しては、小学校で学習しない漢字も5個以上含まれている。このことから、想定対象読者層は小学校低学年までと絞られていないことも考えられる。しかし、子どもに分かりやすいよう、本文中ではあえて漢字にせずひらがなで表記されているものも多く見られた。池澤訳では、「かんたん(簡単)」や「わかった(分かった)」、「すわる(座る)」、「かんじん(肝心)」などがひらがなで表記されている。奥本訳では、「きく(聞く)」、「あいて(相手)」、「なかよし(仲良し)」などがひらがなで表記されている。工藤訳では、奥本訳と同様の「なかよくなる(仲良くなる)」や、「だいじ(大事)」、「まいにち(毎日)」、「しあわせ(幸せ)」などがひらがなで表記されている。堀訳では、「いいました(言いました)」、「ききました(聞きました)」、「わかりませんでした(分かりませんでした)」、「おしえてくれました(教えてくれました)」など、地の文の動詞が全てひらがなで表記されていた。ひらがなで表記されている語彙に関して4冊に共通した特徴などは見受けられなかったが、絵本に限らず様々な文学作品において、想定対象読者層が大人である場合でも、あえてひらがなが選択されているものも見受けられるため、この件に関して深く言及する必要はなさそうである。ちなみに、すべての絵本において「髪」が必ず漢字で表記されているが、その意図は不明である。

他に漢字表記が多い理由としては、子どもの語彙というのはその言葉に関して意味を理解しているが、漢字を知らないという場合も多々存在するため、ルビが振られていることを前提に漢字表記にしたということが考えられる。こうすることで、子どもは自分の持っている語彙に関する知識に新たに漢字の表記が増え、子ども自身の語彙力の増加につながる。

また、池澤訳と奥本訳、工藤訳と堀訳間での漢字の使用数の大幅な差は、前節で言及した本文の内容の省略とも大きく関係していると言える。

4.5 使用語彙について

絵本において使用されている語彙を4冊で比較する。比較対象とする語彙は、4冊ともで省略されなかった内容のなかで使用されているものとした。池澤の原文訳の言葉で、「飼い慣らす」、「絆を作る」、そしてキツネが王子さまに教える「秘密」の内容の、「肝心なことは目では見えない」である。

表 5

原文 池澤夏樹訳	池澤夏樹訳	奥本大三郎訳	堀あいえ訳	工藤直子訳
飼い慣らす	仲良し	ペットになる	きずな	なつく
絆を作る	特別	見えないひもを作る	おたがいに、 大好きかどうか	つながりあう こと なかよくなる こと
肝心なことは 目では見えない	かんじんなこ とは目では見 えない	大切なものは目に見 えない	たいせつなも のは、目には 見えない	いつまでも い つまでも 心の なかに のこり つづける

「飼い慣らす」という訳語について、フランス語で書かれた原文の「domestiquer [飼い慣らす、服従させる、支配する]」を、池澤訳と奥本訳では、同様に「飼い慣らす」「ペットになる」という表現が使用されており、王子さまというひとりの“人間”と、キツネという一匹の“動物”という明確な生物的区別が翻訳に現れている。しかし、池澤は絵本の翻訳では「仲良し」という表現に言い換えていることから、「domestiquer」が使われている原文に忠実に訳した場合、動物が人間と対等な関係ではないという印象を子どもに与えることを回避したと考えられる。また、工藤訳の「なつく」という表現も本来はどちらか一方から他方への信頼を意味する表現であるが、工藤訳では本文中に「おたがいになついたら」と表記があるため、王子さまとキツネの関係性は対等に表現されていると言える。

次に、「絆を作る」は、4冊で最も表現に差異が現れている部分である。小学国語

辞典⁸で「きずな(絆)」を調べると、「人と人との切ることのできない結びつき。」とある。池澤訳は切ることのできない関係性をシンプルにひとことで「特別」と表現している。奥本訳はおそらく、“結びつき”から連想される紐という道具を使って比喩的表現を用いている。堀訳の「おたがいに、大好きかどうか」と工藤訳の「つながりあうこと なかよくなること」は、「絆」を子どもに伝わりやすい表現に噛み砕いて言い換えた結果であるといえる。

最後に、「肝心なことは目では見えない」についてである。池澤は絵本においても「肝心」をひらがなの「かんじん」に置き換えるだけにしている。奥本訳と堀訳は共通して「大切(堀訳ではひらがなで「たいせつ」)なものには目には見えない」と翻訳している。おそらく、一般的に知られている表現は奥本訳と堀訳の方ではないかと思う。筆者自身、本研究を行う前に知っていた訳は「大切」の方であったし、『星の王子さま』を読んだことがない人でも、このフレーズを目にしたことがあるという人は多いと思う。

工藤訳はガラリと変化した翻訳をしている。「目には見えない」ということは「心に残っている」ということであるから、かなりの意識、つまり工藤自身の解釈が全面に現れていると言える。

5. 考察

絵本に翻訳するにあたっての小説とは異なる最も顕著な特徴は、「はじめに」で述べた予想の通り、内容の省略であった。必要な部分以外の内容を省略して全体量を減らすことで、集中できる時間が短い子どもにも読みやすく、理解しやすくなるようにした努力の結果であると言える。翻訳された作品というのは、訳者の解釈が文章にはっきり現れるというのは絵本においても同様である。今回研究対象とした絵本4冊は文章の全体量で分類した場合、池澤訳と奥本訳、堀訳と工藤訳に二分される。前者2冊を比較すると、池澤訳では選択された内容が奥本訳では選択されていない、またはその逆の現象が少なからず起こっていた。

例えば、今回調査対象とした場面の冒頭のシーンについて、キツネが現れ、王子さまに挨拶をして、王子さまが挨拶を返したあと、原文では王子さまが辺りを見回しても誰も見当たらず、キツネが自分はリングの木の下にいと教え、そこで初めて王子さまがキツネの存在を認識してストーリーが展開する。このシーンにおいて、奥本訳では原文に忠実に王子さまはキツネの存在を探すが、池澤訳では王子さまがキツネを探す部分は全て省略され、キツネが王子さまに挨拶をして王子さまが挨拶を返した時点でこのふたりはすでに出会っている。逆のパターンも存在する。王子さまがキツネに、一緒に遊ぼうと提案した際に、原文ではキツネが飼い慣らされていないから遊べないと断ったあと、王子さまが謝罪をしたあとに、しばらくして改めて「飼い慣らす」の意味を尋ねるといふ展開がある。ここでは池澤訳は原文に忠実だが、奥本訳では「謝罪する、しばらく時間が経つ」という部分は省略され

⁸ 湊吉正監修(2008)『チャレンジ小学国語辞典 第四版』株式会社ベネッセコーポレーションより引用(p.250)。

ている。

このような場合、池澤訳と奥本訳で必要であると考えた部分が異なるため、最終的な本文にも差異が現れている。しかし、「キツネがリンゴの木の下に隠れていて、それを王子さまが探す」場面と「キツネの断りに対して王子さまが謝罪し、その後しばらく時間が過ぎる」場面が、子どもがストーリーを理解する際に必要かどうかは第三者が判断できない。よって、省略された内容も必要か不必要かは訳者自身の解釈に完全に委ねられていることは明らかである。しかし、4冊ともに選択された内容が一致する部分があったので、その部分がサン=テグジュペリの原作が最も伝えたかったメッセージであるということは、4人の訳者の中でも共通認識であり、どの絵本を読んだ子どもにも間違いなく伝わっているだろう。

また、竹内(2002)で述べられていたような絵本の語彙の慎重な選び方は、原文の存在する翻訳絵本についても当てはまることがわかった。しかし、漢字の量や種類などから、絵本『星の王子さま』自体が想定対象読者層を小さな子どもだけに限定しておらず、小学生の児童を対象としていると考えることができる。また、福田(2015)では、絵本が子どもの成長に大きく影響をもたらすこと、また、大人が子どもに絵本を読み聞かせることで他人の感情を学ぶことを指摘している。ここでも言及されているが、「絵本を読み聞かせる」という行為は一般家庭や保育園、幼稚園、場合によっては小学校でも頻繁に行われている。そこでは、実際に文字を見て文章を読むのは大人であるため、漢字の量は多少多くても問題はない。むしろひらがなばかりの方が読みづらいつと感じる場合もあるだろう。読み聞かせることを前提とすれば、同音異義語における誤解を防ぐためにも漢字は有効である。

池澤夏樹は絵本の最後に「大人のための訳者のあとがき」として、絵本版で内容を省略したり言い回しを変えたりしている理由について言及している。池澤自身が幼い頃にこの作品と出会ってずっと読み続けてきた経験に触れ、その上で、『星の王子さま』にはすばらしい絵があるから幼い子も入っていける。だが、その先で文章の論理がむずかしかったり、比喩がわかりにくかったりする部分でつまづいて、それっきりこの本との縁が切れてしまったらどうしよう？それはその子にとってとってももったいないことだ。」(p. 70)と述べている。

同様に、絵本の最後にあとがきを掲載している工藤直子は「小さな お友だちへ」というタイトルで、「わたしが いまより うんと 小さかったとき はじめて『星の王子さま』という本を よみました」(p. 22)という書き出しで、この作品に出会った時の感動と、「あれから もっと としをとった いまも『星の王子さま』は かわらずに わたしのそばに いてくれるような気がして」と続け、工藤自身が大人になった現在でも読み続けている本であることを明かしている。

また、絵本のあとがきを、池澤は「これで王子さまと親しくなった子が少し大きくなったら、理解する力がついたら、その時は元のまま版を手渡してやっていただきたい。」(p. 71)、工藤は「いつか ぜひ『星の王子さま』の もっと ながい物語と もっと たくさんの絵に 出会ってね」(p. 23)と締めくくっている。このことから、絵本版の訳者たちは、絵本『星の王子さま』はストーリーを理解するための成長段階での通過点であると考え、いつか成長した子どもたちが原文すべての翻訳版を読

むことを期待して、または読むことを前提として絵本を作っていることがわかった。

6. おわりに

調査における反省点として、「子どもにも理解しやすい表現」というものがどういう基準で存在するのかが先行研究では明らかになっていなかった。そのため調査結果においても、本文中で選択されている語彙や表現が、実際に小さな子どもに理解されやすいのかそうでないかが明確に判断できず、4人の訳者と筆者の感覚での判断になってしまったことが挙げられる。しかしこの点に関しては、文字数や漢字の量などのように目に見えて数値化できるものでは無いため、基準を定めるのが難しいと思われる。また、筆者がフランス語の読解能力が無いため、原文の『*Le Petit Prince*』で使用されている語彙と翻訳版との比較が適切にできなかった。

これは、漢字の使用量に関しても同様のことが言える。調査結果のところでも述べたが、小学校の学習漢字に含まれていて、本来は漢字にすべき語彙であっても、作品の中であえてひらがなにしている場合とそうでない場合が考えられる。しかし、本文を読んで漢字を抽出しただけでは、あえてひらがなにしているのかどうかと、その場合の意図を読み取ることが困難であった。

この2点に関しては、外国作品の翻訳ではなく、日本語の原作を絵本にしたものなどでも検証できると考えられるため、大人向けと子ども向けの表現の違いについてさらに深い調査ができる可能性がある。

参考文献

- 霜崎實(2007)『『星の王子さま』邦訳の表現バリエーション——内藤濯訳を中心に』
『月刊言語』第36巻第4号, p. 40-47.
- 稲垣直樹(2016)『翻訳技法実践論 『星の王子さま』をどう訳したか』平凡社.
- 竹内オサム(2002)『絵本の表現』久山社.
- 中川素子編(2014)『絵本学講座1 絵本の表現』朝倉書店.
- 石井光恵編(2015)『絵本学講座2 絵本の受容』朝倉書店.